

リレー随筆

映画あれこれ～アクション映画と好きな映画～

鹿児島市立病院 糖尿病・内分泌内科 堀切 陽祐

今回リレー随筆のバトンを受け取り、筆を執らせていただきました堀切陽祐と申します。この4月で医師4年目となり、現在は鹿児島市立病院にて糖尿病・内分泌内科医として診療に当たっています。リレー随筆のお話をいたいたいのは、前年度の鹿児島大学病院時代になります。研修時代同期で仲の良かった市來先生からいただいたお話をしました。さて、何を書こうかとあれこれ考えているうちに締め切り間近となってしまってあります。

学生時代は部活やサークル活動をしておりませんでした私は、友人と遊びに行ったり旅行したり、自由な時間を趣味に充ててありました。旅行・ドライブ・カメラなどの趣味もありますが、一番好きなことは映画鑑賞になりますね。高校生の頃から映画というものに出会い、今では深い付き合いになっております。映画館へも行きますが、DVDを購入して自宅で鑑賞するスタイルも好きです。これまで2000～3000本近くコレクションしている次第です（自分でも驚きです！）。

今回は私の一番の趣味である映画を語ろうかなと思います。思いつくままに話させていただきますが、少々お付き合い下さればと思います。異論は大いに歓迎です！それぞれに映画を見て感じることがあり、それは感性ごとにそれぞれ違うはずです。大いに感想を話したり、時には議論したりできることが映画の素晴らしい点だと思っております。

幼い頃から両親が映画を観ている環境で育つたからか、映画と出会ってからというもの、のめり込むように映画の世界にハマっていき

ました。高校生の頃に観た、『ダイ・ハード』（主演：ブルース・ウィリス、監督：ジョン・マクティアナン）がそのきっかけでした。ダイハードシリーズは私にとっては大好きで大切な存在であり、今でも定期的に見返しています。セリフを覚えるくらい観ています。中でも1と2をクリスマスのたびに観たくなる、毎年マクレーン（主人公の役名です）に元気をもらう、今年も一年お疲れ様でした、という意味合いも込めて自分へのご褒美的存在です。しかし、昨年2018年7月のブルースウィリスはインタビューで、「ダイハードはクリスマス映画ではない」とおっしゃっていたそうです。そうだったのか・・でも季節ものでいいじゃないか。ということで私はクリスマスにはダイハードという習慣は外せません。

映画全般が好きです。洋画をよく觀ます。中でも特にアクション映画・サスペンス映画はよく觀てあります。今回はアクション映画を話させてもらいます。

50・60年代の戦争映画や西部劇から始まり、70年代の刑事アクションブームとなるのでしょうか。刑事アクションといえば、『フレンチコネクション』（主演：ジーン・ハックマン、監督：ウィリアム・フリードキン）と『ブリット』（主演：スティーブ・マックィーン、監督：ピーター・イエーツ）でしょうか。どちらも傑作刑事映画、特にカーチェイスのシーンは鳥肌もので今なお伝説ではないでしょうか。フレンチコネクションのカーチェイスでは、街中を対向車やらゴミやら（ベビーカーまで！）ぶつかりながら高架下を爆走する臨

場感！主演のジーンハックマンの表情からもアリアリティが溢れます、シビれます。また、プリットでもサンフランシスコの坂が多い街中を猛スピードで走る、坂の影響で車も飛び跳ねながら走っていく。プリットのカーチェイスシーンではルームミラーを覗く運転手の目線だけのシーンが多用されています。追う側と追われる側の描写を目線の表情で伝える点も秀逸ではないかと。どちらのシーンも、以降の映画でよく多用されるシチュエーションかと思います。オマージュを見つけていくのも映画の楽しみの一つです。

しかし、刑事映画で忘れてはいけない映画、それは私が大好きな映画『ダーティハリー』（主演：クリント・イーストウッド、監督：ドン・シーゲル）シリーズです。マカロニウエスタンで名をあげて西部劇スターの仲間入りを果たしたイーストウッドが、シーゲルと組んだこの映画！イーストウッドの当たり役の一つとなりました。この前にイーストウッドは『マンハッタン無宿』に主演し、シーゲル監督は『刑事マディガン』という刑事ものを撮っています。集大成的な存在となるでしょうか。オープニングで強盗に対してホットドッグを口にしながら大型拳銃が火を吹く！「this is a 44 magnum, the most powerful handgun in the world, (略) Well, do ya, punk?」（世界一強力な拳銃だ、試してみるか？）と語りかける・・最高のオープニングです。映画は猶奇殺人犯を追う、一匹狼的な刑事の物語、手段を選ばず犯人を追い詰めるその姿に私はもう虜になってしまいました。以降シリーズ化して計5作ありますが、私が大好きな映画シリーズです。

先ほどカーチェイスに触れましたが、私のベスト・カーチェイスシーンを挙げさせていただきます。『ボーン・スプレマシー』（主演：マット・デイモン、監督：ポール・グリーングラス）の終盤、モスクワでのカーチェイス

です。ジェイソンボーンシリーズの第2作目です。記憶を失ったエージェントが自分の過去の因縁に決着をつけるべく、攻めてくる刺客と死闘を繰り広げていくサスペンスアクションです。モスクワでのカーチェイスの何がすごいかは、計算し尽くされたカメラワークとそのカーアクションでしょうか。手ブレが多い映像とカット割りを多くして（短めのシーンを多用）臨場感を出しています。手ブレが多い映像ながらも、見せたい焦点やアクションシーンを画面の中心からズラさないため、手ブレが多いながらもカメラ酔いのような状態にはならず、かつスピード感を演出しています。この技法がボーンシリーズ以降多用されるようになりました、しかし完璧なカメラワークであるこのシリーズは超えられていないと感じます。そして、主人公のカーアクションも凄いものです。主人公はタクシーを運転していますが、迫り来る敵はパトカーや高級車で迫ります。しかし主人公は最強エージェントです。刺客との近距離格闘もスマートに勝ち、身近なものさえ武器にします（ボールペンや雑誌もです）。運転中も同じです。主人公にとってはタクシーさえも武器なのです。これがこのカーチェイスの凄いところです！完璧なカメラワークと迫り来る敵をタクシーながら応戦する、その臨場感たるや、凄まじいです。百聞は一見にしかず、ぜひご自身の目で確認いただきたいものです。

話変わりまして、80年代アクションは無敵ヒーローアクションの時代となります。個人的には『ランボー』に代表されるスタローンと、『ターミネーター』に代表されるシュワルツェネッガーの時代かなと思っております。中でも『コマンドー』（主演：アーノルド・シュワルツェネッガー、監督：マーク・L・レスター）というヒーローアクションです。ストーリーは誘拐された娘を救うべく、元コマンドー隊員が敵をなぎ倒していくものです。

ラストの敵アジトを単身突撃する主人公はいつ観ても爽快そのものです。

90年代は等身大ヒーローの時代となるでしょう、その流れを作ったのがダイハードだと思います。無敵ヒーローであったスタローンやシュワルツェネッガーとは違い、ボロボロになりながらもギリギリで悪に立ち向かう、そんな姿に共感すら覚えるのです。加えてダイハードはビルという閉鎖空間で単身敵集団に立ち向かいます。またエレベーターシャフトを利用するこれまでになかった上下方向の空間移動も展開されます。ここも革新的でありました。

もう一つ、この時代は大規模なアクション映画が増えた時代でもあるかと思います。突如上空に現れたUFOに全人類が立ち向かう傑作映画『インデペンデンス・デイ』(主演：ウィル・スミス、監督：ローランド・エメリッヒ)、一度は観たことがあるという方も多いのではないでしょうか。その他にも『アルマゲドン』(主演：ブルース・ウィリス、監督：マイケル・ベイ)も隕石から地球を救うというものでした。また、『ザ・ロック』や『コン・エアー』といったアクション映画もありました。どちらもニコラス・ケイジ主演です。この頃のニコラス・ケイジは大ヒット作が多いです。90年代に入るとSFX技術が発展を遂げたおかげで派手な映像表現が可能になったと言えそうです。

2000年代に入るとアクション映画の流行は、最強エージェントアクション系が増えてきます。代表されるものは前述の『ジェイソン・ボーン』シリーズになるかと思いますが、他にも秀作は多いです。『96時間』(主演：リアム・ニーソン、監督：ピエール・モレル)は中でも特筆すべき傑作だと思います。引退したCIAエージェントが海外で誘拐された娘を救うべく、持ちうるスキルをフル活用して密売組織へ乗り込むというストーリーです。

コマンドーにもストーリーラインは似ていますが、マーシャルアーツやガンアクションを駆使して一人また一人と敵を鮮やかに倒していきます。これまで演技派であったオスカーベンチア優がイメージを一新してアクションに挑む様は圧巻です。(スターウォーズやバットマンビギンズ等のアクション映画にも出ていましたが。) 以降、これまで演技派であったベテラン俳優によるアクション映画が多く制作されました。キアヌ・リーブスによる『ジョン・ウィック』シリーズもおすすめ映画です。

近年のアクション映画はヒーロー映画が席巻しています。なかでもマーベル映画が一大ブームです。私自身もこの4月に公開される『アベンジャーズ エンドゲーム』を心待ちにしています。

そんな私のベスト映画はギャング映画『スカーフェイス』(主演：アル・パチーノ、監督：ブライアン・デ・パルマ)になります。もちろんアルパチーノのギャング映画と言えば『ゴッドファーザー』は大傑作で好きな映画ではありますが、このスカーフェイスは流れ者がマフィアの世界で成り上がっていく、男の生き様という映画です。男たるもの、惚れてしまうような主人公像ではないでしょうか。物語の結末はぜひご覧になっていただければと思います。次点としては『パルプ・フィクション』(主演：ジョン・トラボルタ、監督：クエンティン・タランティーノ)です。群像劇なので主演はトラボルタとサミュエル・L・ジャクソンの2人組となりますかね。他にも多数出演しています。とにかく2人の何気ない雑談に惹かれる、映画の中の曲がかっこいい、ストーリー展開が秀逸と見所満載です。なかなかヒット作に恵まれなかった主演の2人がこの映画で再びスターダムに返り咲いた映画もあります。トラボルタと言えば、『サタデーナイトフィーバー』でのダンスシーンが有名、イメージが強すぎました。この映

画でもユマ・サーマンとツイストを踊ります。

それがもうかっこいいです。

最後に、私が好きな俳優はアル・パチーノです。彼の出演作はほぼ全て観ています。(もちろんDVDも購入しています。) 彼の演技は迫力があり、たちまち引き込まれてしまいます。アツすぎる演技には賛否両論あるかもしれませんのが、そこが魅力です。前述の『スカーフェイス』や『ゴッドファーザー』はもちろん、刑事ドラマ『セルピコ』や、銀行強盗が思わぬ顛末へと進んでいく『狼たちの午後』と名作が多いです。『ヒート』では刑事に扮したアル・パチーノと強盗に扮したロバート・デ・ニーロが対決します。なんとも豪華な組み合わせ！ひりつく男の対決、中でも夜のダイナーでお互い会話をして、各々の信念を語り合う姿は観る者を圧倒するはずです。また、この映画では白昼街中の銃撃戦が繰り広げられます。これもまた映画史に残る名シーンであり、必見です。

思うままに書いていると、あっという間に時が過ぎておりました。他にも語りたいことがあります。この辺でお開きにさせていただきます。これからも映画とともに過ごしていきたいと思います、異論反論は歓迎です。映画で大いに盛り上がりましょう！

拙い文章に最後までお付き合いいただきましてありがとうございました。

次号は、垂水中央病院 堂蘭直樹先生のご執筆です。
(編集委員会)

